

序

戦争はダメ

戦争は絶対に駄目だ。

戦争は悪だ。最悪だ。極悪だ。

戦争はやってはならない。何が何でも、してはならない。

この世で一番恐ろしくて怖いのは戦争だ。

だから、だから絶対に戦争はしてはならぬのだ。

戦争絶対反対

戦争は人々を鬼にする。悪魔にする。そして、罪なき人を殺す。戦争は人々を狂わせ、極悪非道の行為に走らせる。危ない話になる。

戦争は人類最大の凶悪凶暴行為だ。人の心も体も財産もすべてを無差別に破壊しつくす。何にも残らず、無くなってしまう。死と貧苦と懺悔げが待つのみだ。

そんな戦争が我が町にもあった。

私が生まれ育ったのは、千葉県匝瑳郡東陽村（現千葉県山武郡横芝光町）である。何の変哲も無い九十九里浜平野の小さな村である。この草深い平和な田舎の村にも戦争があったのだ。

題して『我が町にも戦争があった』のこの本は、そこでの少年時代の戦争体験記である。私は昭和八年（一九三三年）の生まれだから、太平洋戦争は小学校二年生から六年生にかけての多感な少年時代のことであった。

怖かった。苦しかった。辛かった。今思えばゾッとする。はらわたが煮えくり返り、身の毛がよだつ。憎んでも憎みきれない体験。

読者のみなさんにも同じ思いをした人が大勢いらっしゃるだろう。共通体験で同感同感と共鳴しながら、私の村や町はこうだったと思い返し、忌まわしい記憶を蘇らす人もいよう。

それを一緒になって子や孫に語り、文章はまずくても、一事でも多く書き留めて後世に残そう。

「あなたの町や村の戦争体験」を書こうではないか。

それは立派な生き証文による歴史になる。それだけでなく、人類が未来永劫絶対にしてはならない戦争を未然に防ぐ、草の根での抑止力となり、身近な所から戦争を防止できる。

これは戦争を体験し、戦争に苦しみもがき、やっとの思いで生き残った人間の義務ではなかるうか。日本中の名も無き私のような大勢の人がこぞって戦争体験記を語り、書き残せば、山のような記録が村や町に残り、後世に役立つこと間違いないと思う。

そんな思いで書いたのがこの本である。よわい八十六歳、喜寿や傘寿を記念し、今、書き残さねばの思いに駆られての執筆である。

遠い記憶。それも七十年余りもの昔の小学生時代のものである。子供の目や体、体感主体の記憶故、過ちや誤謬、思い違いや忘却失念も多々ある。加えて、加齢の上に闘病中とあ

って、もとより正確さは保証の限りではない。その点を断り、深謝しておきたい。

沖縄での地獄のような戦いの惨状、広島・長崎の筆舌に尽くし得ぬ原爆体験、東京を始めとする多くの都市で、一木一草まで焼き払われた大空襲。加えて、南に北に炎暑や酷寒の中で戦い、傷つき死んでいった人々の戦場での惨たらしい体験記にはほど遠いものである。

しかし、日本中到处にそれぞれ違った形で悲惨な戦争があったのも事実である。『我が町にも戦争があった』は、それを綴ったものである。

願うことなら、多くの人に読んでいただき、小国民（小学生）がああ戦争をどのように戦ったかを知った上で、後世の戦争反対の糧にしてもらえたら、これに過ぐる喜びはない。

結びに、本書出版にあたり、あけび書房社長久保則之様に特段の御高配を賜り、上梓することができた点に対し深甚の謝意を表す次第である。

令和元年（2019年） 盛夏 著者